

茨城県における気象俚言(りげん)について*

井 坂 末 松**

要 旨

従来、茨城県における気象俚言の調査研究は、局部的には若干のものがみられるが、県下全域にわたるものは一度も試みられなかった。このたび、茨城県高等学校教育研究会地学部の研究シリーズの一環としてまとめる機会を得た。資料は県下高等学校の協力を得て、各学校の生徒をとおして調査、収集した。その俚言の延べ数は18,841である。これらをまとめて最終的に分類表に残った俚言数は2,540におよぶ。その分類表より、まず、県下全般の俚言の使用の実態について考察を加え、さらに雷に関する俚言、筑波山に関する俚言、台風に関する俚言など比較的日常生活において、興味関心の深いものについて若干の考察を加えた。

1. まえがき

気象俚言とは、長年月にわたる人間の生活経験から生まれ、かつ利用されてきた気象に関することわざであるが、最近の急速な気象機関の発達とともにその利用度はうすらいでいくように考えられる。しかしながら、局地的な大気の現象は、気象学的な解析による天気予報からは得られないものを適切に表現する俚言が数多くあり、なおざりにはできないように考えられる。

最近の研究としては、菊地・尾崎・山口・宮園(1964¹⁾)による北九州における海難防止に関する天気俚言、井坂(1964²⁾)による霞が浦東岸地域における天気俚言、栗原(1965³⁾)による三浦地方における天気俚言、さらには森(1967⁴⁾)による農家の気象への関心について、(その2、宮城県北部の気象俚言について)などあるがその数は決して多くない。

筆者は、かつて霞が浦東岸地域に使用されている天気俚言について、主としてその使用の実態について解析したが、さらにこれを発展させる意味をもって、茨城県全域に使用されている気象俚言を、茨城県高等学校教育研究会地学部の研究シリーズ†の一環としてまとめる機会を得た。

従来、茨城県内における気象俚言については、前記のほか堀川(1965⁵⁾)による茨城県西茨城郡地方における気象俚言の収集、分類とそのほかに若干はあるが、全

県にわたっての収集、分類はまったく初めてである。収集した俚言の数は膨大なものであり、その上俚言そのものがいつ、どこで、どのような状態を表現しているのかははっきりしないものが多い。さらに全俚言の中でかなりの数を占めている生物に関する俚言は、生物の生態についての知識を必要とするゆえ、考察を加えることはなかなか困難なことである。今回は使用の実態を把握するという見地から、収集した俚言を整理、分類して全般的な考察を加え、さらに本県の俚言として特に興味関心をひく筑波山に関する俚言や雷、台風に関する俚言の2,3についての考察を試みた。

2. 資料の収集および分類方法

資料の収集方法は、茨城県を34地域にわけ、各地域にある高等学校の生徒を通して行なった。資料の回収は生徒→各高等学校→筆者という方法をとった。

回収した調査用紙は1,370枚、調査に参加した総人数は5,198名、それらを職業により大別すると、農業：2,847名、勤め人：420名、商業：236名、漁業：36名、その他の職業：1,468名および職業欄に記載がなかった者191名である。収集した俚言の延べ数は18,841であり、まったく同じ俚言や同意の俚言と考えられるものをまとめて、最終的に分類表に残った俚言の数は2,540である。

この2,540の俚言は天気の予想、災害の予想および豊凶の予想の三つの大項にわけ、さらに天気、災害、豊凶を予想するよりどころとなる事象(例：朝霧が濃いときには晴れる→霧)をとりあげ、自然現象、動物、植物およびその他の4項目に分類した。

3. 俚言の全般な使用状況

まず、本県における気象俚言の使用状況は、第1表にみられるように天気を予想する俚言が全体の81.2%と占

* On the Weather Proverbs in Ibaraki Prefecture.

** Suematu Isaka 茨城県立水戸農業高等学校
—1969年2月8日受理—

† 茨城県高等学校教育研究会地学部, 1968: 茨城県の気象に関する俚言(りげん), 地学研究シリーズ第9号159頁

第1表 分類表における各項別の俚言数およびその百分率

分	類	俚言数	%
天気を予想する俚言	自然現象	1,389	54.7
	動物	535	21.0
	植物	91	3.6
	その他	49	1.9
	(計)	2,064	81.2
災害を予想する俚言	自然現象	208	8.2
	動物	137	5.4
	植物	50	2.0
	その他	12	0.5
	(計)	407	16.1
豊凶を予想する俚言	自然現象	61	2.4
	動物	0	0.0
	植物	5	0.2
	その他	3	0.1
	(計)	69	2.7
総計		2,540	100.0

倒的に多く、次に災害を予想する俚言が16.1%、豊凶を予想する俚言が2.7%の順となっている。なかでも、自然現象により天気を予想する俚言は全体の54.7%となっており、収集した全俚言の過半数を占めている。特に雲の状態により天気を予想する俚言の数は300、以下風—182、空—149、雷—121、音—118……の順となっているが、これらは霞が浦東岸地域における気象俚言の調査とほとんど同じ順位となっている。

次に、本県の各地域においてよく使用されている俚言30（記入者数の多い順にならべた）は第2表のとおりであるが、これらはいずれも子どものころからよく聞き、また全国各地でも古くから言い伝えられているものであり、自然現象により天気や災害を予想する俚言が17、動物により天気や災害を予想する俚言が13となっている。後者は動物の生態学的な見地からの考察を必要とするゆえ安易な結論は下せないが、前者はほとんどが気象学的な根拠を有しているものであり、なかでも本邦における天気が西から東へ移行することに関係する俚言やかさに

第2表 茨城県内でよく使用されている俚言

	気象俚言	記入者数	使用市町村数
1	夕焼けは晴れ（明日の晴れ・明日のなき）	929	88
2	朝焼けは雨（その日の雨）	893	87
3	アマガエルが鳴くと雨	500	70
4	月にかさをかぶると雨（明日雨）	489	87
5	筑波山に雲がかぶったときは雨。よく見えるときは晴れ	462	65
6	ネコが顔を洗うと雨	419	58
7	タバト鳴くと天気よい（空見るな。人雇え）	376	58
8	雷は北方からはなかなか来ないが南西方からはきわめて早く来る	259	70
9	月にかさをかぶり、その中に星があると星の数だけ天気が続きのち雨	235	49
10	汽車の汽笛が聞こえると雨（聞こえないと晴れ）	230	67
11	モグラが土を盛り上げると雨が降る（近日中に雨）	224	65
12	ツバメが低く（地面すれすれに）飛ぶと雨が降る	207	70
13	ネコが耳までかけて顔を洗うと雨	204	49
14	朝バト鳴くと雨が降る（みのをきる）	190	37
15	地震が起きた時刻により天気を判断する（5つ7つの雨に4つひでり、6つ8つ風に9つはやまい）	183	71
16	月にかさをかぶると明日は曇りまたは雨	177	11
17	北山しぐれは音ばかり	169	58
18	空一面に星が輝いていると明日晴れ	155	37
19	アリが長く行列を作ると（移動すると）雨が降る	150	45
20	夏海、秋山	150	44
21	カエル（カジカ）が鳴くと雨	145	34
22	夕方、子どもが騒ぐと明日雨になる（冬は雪になる）	139	56
23	太陽にかさをかぶったときは雨（明日雨）	128	60
24	ヨシキリが高く巣を作る年は洪水あり	127	56
25	朝霧の濃いときは晴れる	127	52
26	朝雨と女の腕まくり（天気よくなる、たいしたことない、かっぱをぬげ、みののけ）	122	54
27	雷がなると梅雨があける	115	43
28	ハチが低いところに巣を作る年は暴風雨（大風、台風）多い	102	30
29	西が曇れば雨（西が明るいとき晴れ、天候は西からくる）	100	46
30	ハチが高いところに巣を作ると洪水（台風）	97	32

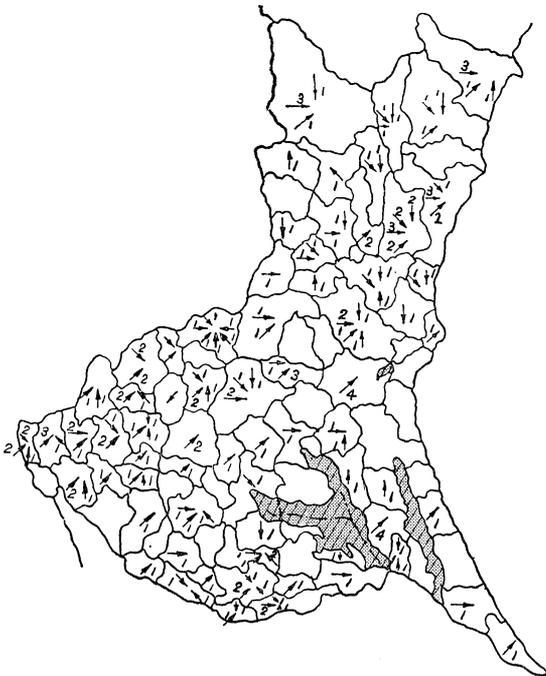
関する俚言、動物の巣に関する俚言が比較的多いことが目立っている。

4. 雷に関する俚言について

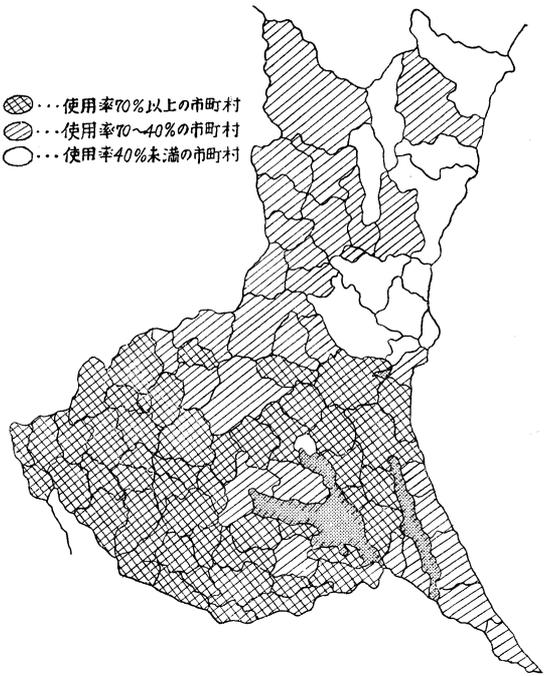
雷とは上昇気流によって発生する雷光、それに伴う雷鳴や激しい降雨をふくめた現象であり、その発生原因により熱雷、渦雷および界雷の三つに大別することができる。雷に関する俚言を論じるときに、まず俚言の中の雷が三つのどれに属するかを知ることが肝要である。

本調査における雷に関する俚言は総数 247、その内訳は天気を予想する俚言が 222、災害・豊凶を予想する俚言がそれぞれ 17、8 となっている。次に雷に関する俚言の中から、われわれの生活に身近な襲来方向について考察を加えてみる。

まず、雷に関する俚言による市町村別襲来方向を示す第 1 図によると、県北はおもに N-W-SW、県西は NW-W-SW、県南は W-SW、県東は SW-S の方向からの襲来が多く、したがって北部から南部にいくにつれて N→W→S の方向の雷の襲来が多くなっていることを示している。また SW からの雷は県北までに及ぶ



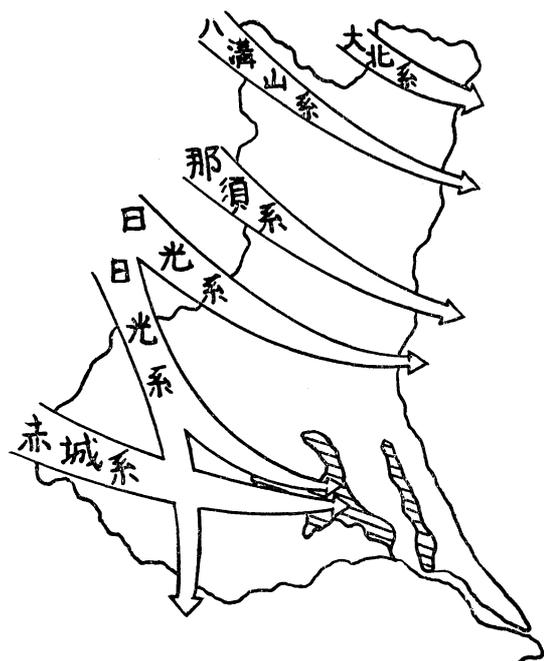
第 1 図 「雷は北方からはなかなか来ないが南西方からはきわめて早く来る」以外の雷に関する俚言による市町村別襲来方向（数字は使用記入者数）



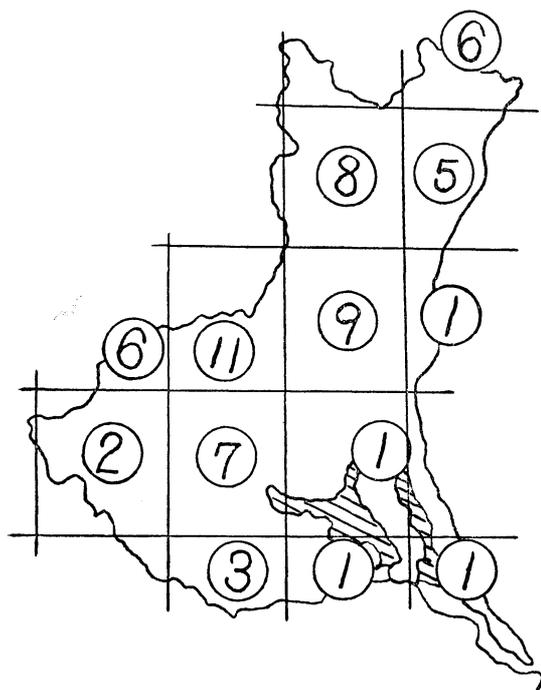
第 2 図 「雷は北方からはなかなか来ないが南西方からはきわめて早く来る」の市町村別使用率

が、反対に N からの雷は県中央部以北にみられるのみである。次に第 2 図は「雷は北方からはなかなか来ないが、南西方からはきわめて早く来る」の市町村別使用率を示したものであるが、この図からも前記のように県南西、県南、県東部において多くの使用率がみられると同時に県北までその使用がみられ、本県の雷の襲来方向は SW からの圧倒的に多く、次に S、W からの襲来があり、N からの襲来は全般的にみて少ない。第 3 図および第 4 図は水戸地方気象台編の「茨城県の気候⁹⁾」からの引用であるが、第 3 図は本県における雷雨のおもな経路であり、これによると雷雨はそのほとんどが NW または W から E の方向へ移動しており、本調査における襲来方向とに多少の差異が認められる。しかし第 4 図にみられるように、夏期に茨城県内においてかなりの雷の発生があり、発生した雷をその地方で俚言の中でどのようにとらえているかに一つの問題があり、また第 3 図は主として熱雷の移動方向と考えられるが、熱雷以外の渦雷や界雷が俚言の中にどのようにとらえているかにも大いに問題がある。

以上、襲来方向に関する俚言についてのみ考察を加えたのであるが、ほかに多くの興味ある俚言があり、今後、



第3図 茨城県における雷雨のおもな経路（水戸地方気象台 1959による）



第4図 茨城県における雷雨発生分布（水戸地方気象台 1959による）

逐次取り上げて究明していきたい。

5. 筑波山に関する俚言について

一般に気象俚言の中には全国いたるところでその地方にある山の名を使用したものが必ずあり、かつその数はかなり多い。本県においても数多くの俚言が見受けられる。ことに関東各地から眺められる名山である筑波山に関する俚言は数多くあり、本調査におけるその数は69におよぶ。これらの俚言を次の三つに分類した。

(1) 単に方角を表わすのに筑波山を利用している俚言

(例) 筑波の方が晴れていると天気よい（水戸市）
筑波の方から来る雷はきわめて早く来る（常陸太田市，小川町）。

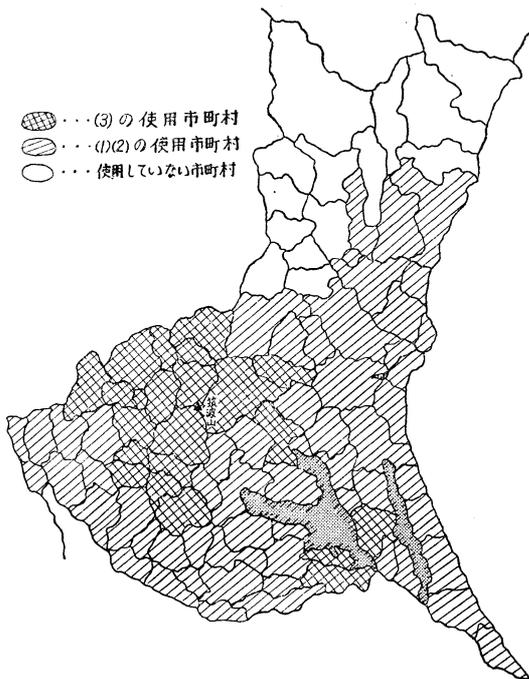
このような俚言は全部で16あるが、いずれも筑波山をその地方の気象変化の指標としている。

(2) 筑波山の漠然とした状況から気象を予想する俚言

(例) 筑波山が雲をかぶっているときは雨，よく見えるときは晴れ（全県）。

筑波山が夕方ごろはつきり見えると明日風が吹く（波崎町）。

このような俚言は12あるが、一般に遠い地方から筑波山が見えるか見えないかということから広範な気象を予想している。



第5図 筑波山に関する俚言の使用分布図

(3) 筑波山にかかる雲の種類やその他の詳しい状況から気象を予想する俚言。

(例) 筑波山にはちまきすと雨が降る（八郷町、筑波町）

筑波山の上に離れてかさのような雲が浮いてると雨（大和村）

このような俚言は(1)、(2)に比べて圧倒的に多く、その数は41におよぶ。これらは局地気象の解析という点で最も重要視すべき俚言と考えられる。

さて、以上のように三つに分類したのであるが、これらの使用分布図は第5図のとおりである。この図によると、(3)は当然筑波山の近在の市町村、(1)、(2)はその周囲の市町村で使用されているが、麻生、東、美浦の3町村のみが離れて(3)を使用していることが目だっている。これらの町村はいずれも筑波山を湖上に眺められるところであり、眺望のよくきく地域であるためと考えられる。

次に、筑波山に関する俚言の中で目だつものに、

筑波山にのだれ雲がかかると天気が悪い（千代川村、真壁町）

筑波山にのだれ雲がかかってとれないときは梅雨に入ったしるし（下妻市）

など、のだれ雲と称するこの地方独特の表現の雲があり、筑波山の西方に位置する市町村に多く使用されている。これは、東風により湿気をもった大気が、筑波・加波連山の山頂を越えてくるとき上昇して雲が発生し、反対側に下降するときに消失するわけであるが、その山頂を越えるときに発生した雲が、ちょうど筑波山の中腹あたりにかかって見える状態をのだれ雲と称しているものである。このようなときは西方に低気圧が接近しており、やがて天気が悪くなることになる。

筑波山に関する俚言とはかぎらないが、のだれ雲のほかに、ねた（層をなした白い雲）、かつくい（薄黒い雲）、みずゆき（日照りのとき太陽から西にかけて見える直線的な雲）など独特の表現をしているものがたくさん見受けられる。これらは局地気象の予想という点で、どのように用いられており、また語源そのものの追求なども興味あるものであり、今後の追跡調査の課題として取り上げていきたい。

6. 台風に関する俚言について

本調査において、災害に関する俚言は第1表にみられるように総数407、そのうち台風に関係あると考えられる俚言の数は325となっており、台風がいかにわれわれの日常生活において関心の大きいものであるかを明確に

表わしている。これらの中から2、3を取り上げ考察を加えてみた。

東から立ち雲（ゆげえ、わかえい）が出たり入ったりすると嵐（台風）がくる（鹿島町、神栖村、麻生町）。南東に積乱雲が早朝に出たり入ったりすると必ず台風がくる（北浦村）。

本県に接近する台風は主として南西方からくる。このようなときは大きな気圧の谷に入っているときであり、前線が生じたり、たとえ前線が生じなくとも、不安定な大気層の中に入ってよく積乱雲を発生する。俚言はこのような状態をとらえているものと考えられる。このほか、「辰巳に雲がたつと嵐（大雨）がくる」とか、「南東にわかえい（入道雲）がたつと一週間以内に暴風雨あり」など同じような俚言が多くみられる。

台風が南東（辰巳）のときは強く、南にかかると弱い（総和村）。

大きい台風はたいいてい南東の風が吹く（波崎町、山方町）。

この二つの俚言は、どちらも南東の風が吹くときは接近して大きい台風になることをいっている。一般に、本県に接近する台風は、ほとんどが南西あるいは南方から北東または北に向って通過するものが多い。台風が接近して風向が南東であることは、台風の中心が本県より西方から本土に上陸して縦断し、北または北東に通過する台風であり、台風に伴う風の強いことはいうまでもなく、山岳地帯にまともな強風が吹きつけることとなり、雨量も多くなる。また南風になったときは、台風の中心がすでに北または北東に通過したことであり、当然弱くなる。

以上の俚言はいずれも雲の状態や風向から台風を予想しているが、台風に関する俚言の全般をとおしてみても雲や風の状態から予想する俚言が圧倒的に多く、動物では巢の高さから台風の襲来を予想している俚言が多くみられる。

次に、関東地方で特色のある北東風と悪天候については、「北東の風が吹くと次第に天気が悪くなる」や「北東（丑寅）の風が吹くと一週間天気が悪い」など2、3の関係ある俚言がみられた。しかし、俚言の数の少いことや使用市町村の少ないことから、その影響範囲、すなわちその局地性については明確な結論は下せなかった。

7. あとがき

この研究は、まず従来一度も試みられていなかった茨城県全域に使用されている気象俚言を収集し、分類表を

作成して、全般的な考察を加え、さらに多くの俚言の中から、特に興味関心をひく若干の俚言について気象学的な解析を加えてきた。しかし、同一現象からまったく反対の現象を予想する俚言や動・植物により天気などを予想する俚言など、個々の俚言を入念に解析するには、その数はあまりにも多く、また多くの要素が入りまじっており、したがって、茨城県における気象俚言の研究はその出発点についての感じを深めるばかりであり、今後の研究にまつところが大きい。

広範囲にわたるこの種の研究が、多くの時間と労力を要することはいうまでもないことである。今回はその収集、分類に大部分の時間を労し、むしろ肝心な考察についてはわずかを労したのみであり、深く反省させられる。しかし、ここに多くの問題点を提起したことは疑いのないことであり、今後あらゆる機会をとらえて、個々の俚言の追跡調査をすすめていきたいと考えている。単に俚言の研究が歴史的な遺物の如きにとどまらず、局地気象の解析という点で大きな発展を願うものである。

最後に、この研究をすすめるにあたって、貴重なるご助言を賜った法政大学助教授吉野正敏博士、この研究を企画し、終始ご指導をいただいた茨城県高等学校教育研究会地学部玉村幹雄前部長、鷺和夫現部長、茨城県教育研修センター中村一夫、谷萩充両研究主事ならびに地学部幹事のかたがた、また資料の収集にご協力下された茨城県下33高等学校の地学担当の教官ならびに生徒諸君、

さらには資料の分類にご協力下された茨城県立水戸農業高等学校永井保郎氏ならびに地学クラブの生徒諸君に深い感謝の意を表する次第である。

参 考 文 献

- 1) 菊池繁雄、尾崎康一、山口享、宮園実康、1964：北九州における海難防止に関する天気俚言、*天気*, 11, 131~137ならびに11, 166~172.
- 2) 井坂末松、1965：霞が浦東岸地域における天気俚言、*天気*, 12, 55~60.
- 3) 栗原善作、1966：三浦地方における天気俚言、*天気*, 13, 143~150.
- 4) 森俊彦、1967：農家の気象への関心について。（その2 宮城県北部の気象俚言について）*天気*, 14, 164~170.
- 5) 堀川収、1965：茨城県西茨城郡地方における天気予知に関する俚言、農作豊凶に関する俚言、茨城県高等教育会「高等教育」特集12号.
- 6) 水戸地方気象台編、1959：茨城県の気候、気象協会関東中部支部.
- 7) 岡田武松、1935：気象学下巻、岩波書店
- 8) 紫雲荘編、1936：天災予知集、紫雲荘.
- 9) 全国学農連盟編、1948：全国天気予知、学習社.
- 10) 和達清夫監修、1954：気象の事典、東京堂.
- 11) 大後美保、1956：ことわざの真実、三省堂.
- 12) 網仲七之助、1963：房州地方の天気俚言、富崎測候所編集、防気資料 No. 2
- 13) 大後美保、1965：新説ことわざ辞典、東京堂.
- 14) 簀益夫、1965：信州の天気のことわざ、古今書院.

[新刊紹介]

福井英一郎：気候学論文集

B 5 版、482頁、(定価1,400円、送料別)

福井英一郎教授は周知のとおり、日本の気候学の指導者として、多くの門下生を育成されたばかりでなく自ら数多くの論文を執筆されてきた。

この論文集は、教授が本年3月、東京教育大学を停年退官された機会に、これらの論文の中からとくに重要と思われる37篇を自選され、1冊にまとめて出版されたものである。

この中には、気候学の研究論文として非常に重要な位

置を占めているにもかかわらず、今日では容易に原典にあたれないものも数多く含まれている。いわば、この一冊がそのまま日本における気候学発展の跡を示す道標とも考えられる。

本論文集は、元来、東京教育大学地理学教室が主催して行なわれた退官記念会の際、関係者に配布されたものであるが、教授の業績が、より多くの気象学関係者に再読され、学界の発展の一助になることが望まれる。

なお、本論文集は、日本気象協会の販売課（東京都千代田区神田錦町3-23）に申込むと販布される。

(河村 武)